

変わり者これくしょん

バートリー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ちよつと変わった艦娘たちが繰り広げるコメディー。

この娘がこんな性格だったらどうなるだろう？とか

こんな性格の娘もいるんじゃない？とか

そんな話を書き連ねていく予定です。

初投稿ですので至らない点などありますでしょうが、どうか暖かい目で見守ってください。

*この作品には独自設定やキャラ崩壊が含まれる可能性があります！
*不定期投稿になります。

目次

でっかい子供とちっさいオカン	1
でっかい子供の事情	10
青い先輩と白い後輩	19

でっかい子供とちっさいオカン

「ねえ叢雲」

「なによ司令官」

「そろそろかなあ」

「さつき連絡があつたばかりじゃない。もうちよつとかかるわよ」

「そっかあ」

「そんなに気になるの？」

「あの娘がはしやぎすぎて何かやらかしてないか心配でねえ」

「あのおバカ一人なら駄目だけどあいつが付いてるもの。大丈夫よきつと」

「たんこぶ幾つ作つてくるかな」

「3つで済めばいいものね。賭ける？」

「止めておくよ。この手の賭けで君に勝てた試しが無いし」

「あら残念」

2つの人影が港にあった。

その内の一つ——この鎮守府に於いて『提督』だとか『司令官』だとか『クソ提督』と呼ばれる——がとりとめもない言葉を投げ掛け、もう片方——自身の『初期艦』である『叢雲』——がそれを受けて言葉を返しながら、仲間の帰投を待っていた。

「にしてもあの娘が来てくれて本当に助かったわ。あの娘が来てから出撃での皆の負担が減ったし——飯も美味しくなったし」

「苦労も増えたけどね。こないだも鳳翔さんのところで浜風が愚痴ってたわ」
「なんて？」

「『彼女を止めようとする」と必ず巻き込まれてとても疲れます』『最近では皆彼女と私をセツトに扱ってるみたいで誰も助けてくれない』『姉妹に比べると影が薄くて辛い』『最近提督と添い寝が出来なくてストレスが溜まってる』とかなんとか」

「わーお切実。あと最後に聞かせてはこちらの言い分を聞いて貰おう」
「私は何も言っていないわよ」

「確かに私は彼女を愛らしいと思っているし彼女の身体に魅力を感じたことは一度や二度ではない。だがこれは決して劣情などによるものではなく古今東西森羅万象あまねく凡てのものに共通する感情つまり愛そう愛ゆえのものでありその感情に支配された私に彼女を拒むことなど出来ずそもそもその夜は眠る以上のことは何も起こっておら

ずつまり私は――」

「いいから黙りなさい」

叢雲が提督の両目に右手中指と人差し指を突き刺す。目がああ目がああ等と喚きながらゴロゴロ転がる提督。この二人にとって珍しくない光景が繰り返られていた。

ついでに言ううと浜風は決して特徴のない艦娘ではない。ただ、個性のW杯が常時開催されている陽炎型においては身体的特徴だけで目立つことが難しいというだけの話である。

『てーーーーーーーとくーーーーーーー!!!』

「あら、思ったより早かったわね」

「だねえ、もうちよつと掛かると思ってたよ」

「身だしなみは整えておきなさいよ。さつき散々転がってたんだし」

「はいはい了解しましたよつと」

港から広がる海の上にかすかに複数の人影が浮かんでいるのが見えた。最初は米粒程の大きさだったそれは近づくにつれて徐々に大きくなり、先程の音が聞こえた辺りからその速度を上げていった。

その内の一つがこちらを認めるや否や複数の人影を離れて猛スピードで近づいてきた。

『てーーーーいーーーーとーーーーくーーーー!!!』

「ねえ叢雲」

「なによ司令官」

「これはいつものパターンかなあ」

「いつものパターンでしょうね」

「たまには穏便に済まないものかねえ」

「無理ね、諦めなさい」

「見捨てた上に私から離れるとは秘書艦の風上にも置けないやつだ」

「災害を前に職務を優先出来るほど出来た艦娘じゃないのよ私」

「提督————!!!」

叢雲に反論しようとした提督は、しかし猛スピードで自分に抱き着いてきた艦娘への対処でそれどころでは無くなってしまふ。

「提督提督聞いてください！今日の出撃も凄かったですよ！道中は空母の皆さんがワーツって凄くて！海域奥地まで行ったら皆私に向かって砲撃してきて私も負けじとバンバン撃って！私が引き付けてる隙に皆がドゴンって!!夜戦に持ち込んでからはもう水雷戦隊がもうシャツシャツシユバツドンって!!!すんごいスリリングで迫力があつてもう最高で!!!」

提督に抱きつきながら語彙力を何処かに棄ててきた様な報告めいたことを行う艦娘。ちなみに彼女は駆逐艦でも巡洋艦でもましてや空母でもなく、立派な戦艦である。

そして彼女によろく抱きつかれついでにクルクル振り回されてる提督は意識が大破し轟沈寸前であつた。

「いんの……………」

そんな彼女の元に近づく一人の艦娘。艦装を装備しながらも身体の所々に傷が出来ており、出撃から帰投したことが伺える。

その艦娘は水面を滑りながら勢いよくこちらに近づくと勢いを殺すことなくジャンプし――

「大馬鹿がああああああ!!!」

提督に抱きついていた艦娘に、惚れ惚れする程見事なキックをかました。

提督に抱きついていた艦娘は提督を離して崩れ落ち、キックを決めた艦娘はこれまた見事に着地して振り返り、憤懣遣る方ないといった表情を浮かべながら、蹴られた箇所を押さえて蹲る艦娘の元へ向かう。

「うう……痛いです『霞』……。ツツコミは厳しくも仄かに優しさが感じられる加減でやってってくれていつも言ってるじゃないですかあ」

「こっちもいつも言ってるけど、いい加減帰って来て早々司令官に抱きつくの止めなさい

い！ボロボロの格好で抱き着くなんてはしたないったら！それにあんた今日の――

そのまま『霞』と呼ばれた艦娘は説教を始めた。年端も行かない子供の見た目をした駆逐艦が成熟した女性の見た目をした戦艦に説教をするという一見奇妙な光景は、この鎮守府ではもはや当たり前のものになっている。現に遅れて到着した他の出撃メンバーは特に気にすることなく言葉を交わしながら鎮守府に戻っていく。ついでに意識が怪しい提督が気につけられないのもいつもの光景だ。

「大丈夫？」

「なんとかね。いつものことながらしんどいものだ」

「あの娘に言えばいいのに」

「そう思うなら叢雲も私を守ってくればいいのに」

「駆逐艦が戦艦に夜戦以外で勝てるわけないじゃない」

「私の目がまともならあそこに昼間から戦艦を圧倒してる駆逐艦が見えるんだが」

「アイツは戦艦相手になるとエリートになる特別艦よ」

「そっかあ」

「にしても惜しいことをしたわ。やっぱり賭けとくんだったわ」

「5つだったかな。恐れ入ったよ」

「さつき出来たのを含めれば6つね。よくもまあ一回の出撃でこんだけアイツを怒らせられるもんだわ」

言葉を交わしながら叢雲は提督の手を引いて立たせる。まだ執務は残っている。出迎えが終わった以上港にずっといるわけにもいかない。

提督は鎮守府に戻る直前に、まだ港に残っている二人に声を掛けた。

「二人ともお疲れ様。報告は後でいいからしっかりと休んでね」

提督の言葉に、霞は説教を中断してそっぽを向き、もう一方は目を輝かせて反応した。

「ありがとうございますー！よかったですらお昼は食堂で食べていってくださいねー！私、腕によりをかけて作りますのでー!!」

大きな声で返ってきた返事に、提督も少し大きな声で応える。

「君の料理は絶品だからね。ぜひ食べさせてほしいよ——大和」

提督の言葉に彼女——『大和』は大きく手を振って応えた。

なお、大和が霞の説教から解放されたのは二時間後だったという。

でっかい子供の事情

「ねえ大和」

「なんですか提督?」

「君宛てに手紙が来てるよ。大本営からの書類と一緒に来たし、十中八九彼からだよ」

「え、またですか? ちよつと前にも来たような…」

「うん、最初の手紙から二ヶ月、今回で五通目だね。多いな少ないかで言えば間違いなく多い」

そういつて手紙を差し出すのはこの鎮守府の提督。その手紙を受け取るのは本日の秘書艦である戦艦大和。二人は朝から共同でそこそこの数の書類と格闘しており、その最中に見つかったのがこの手紙であった。

「んもう、あの方も心配性ですね。この大和の何が心配だというのですか」

「落ちてる資材食べてお腹壊してないかとか、なにか物壊してないかとか、気になる娘にちよつかい出して泣かせてないかとか、まあ色々あるだろうねえ」

「それはもう昔の話です！今はそんなことありません！」

「でもこないだの雨の日に、出撃も無いのに傘壊して『明石』に泣きついてたじゃない」
「!?何故それを……」

「同じ日に傘の修理依頼が相次いだらしくてね。特に強い雨でもないのにと不思議に思ってたら、大和が傘持ってきて納得したらしい」

「内緒にしててって言ったのにい！明石さあん！」

「どうか資材の発注をするのは私なんだから、変なことがあつたらすぐわかるに決まってるでしょうに。別に皆と遊ぶのはいいけど、チャンバラに夢中になりすぎないようにね」

「はあい……」

大和が顔を赤らめて俯く。少し空気を変えようと提督は話題を変える。

「まあ色々あつたとはいえ、自分が建造して短い間ながらも面倒を見た艦娘が異動したんだ。そりゃ心配にもなるだろうさ」

そう言いながら提督は、大和が異動した経緯を思い出していた。

艦娘の出生、つまり建造については未だに謎に包まれている。

艦娘を動かす燃料と兵装用の弾薬、艦娘の艦装に使われる鋼材とボーキサイトを妖精に渡すことで確実に艦娘を建造出来ること、この四つの資材の量を調整することである程度建造出来る艦種を絞り込めること。幾多の検証によつてこの二つの事実が発見されたものの、これらの資材から何故見目麗しい艦娘が出来上がるのか、同じ資材を投入しているのに何故別の艦娘が出来上がるのか、鋼材などを使っているのに何故出来上がった艦娘の肌はあんなにもすべすべもちもちなのか等々、謎は尽きない。

まあでもそもそも妖精からして謎でしかない存在であり、ちゃんと艦娘が出来てくれるのだからそれで構わん細かいことは気にするなということで、海軍はこの建造方法を採用している。

そんな摩訶不思議な妖精マジックにより生み出される艦娘だが、時折普通とは違った性格を持つて建造されることがある。個体毎に違いはあるが、中には普通の性格を180°反転させた様な性格になることもあるようだ。この様な艦娘は『変異艦』と呼ばれている。

とはいえ、性格こそ違うものの、艦装の性能は普通のものと同じではないことが判明し

ているため、余程の問題がなければ通常の艦娘と同様にそのまま運用されることになっている。

今からおよそ一年と半年前、大本営に所属するとある『提督』が建造を行い、生まれたのが他でもないこの大和であった。建造自体は何事もなく成功したものの、この大和は変異艦として少々困った状態で生まれてきた。

一つは戦艦大和としては自由奔放な性格で生まれてきたこと。もう一つが強い出撃願望であった。

艦娘という存在は、本人の性格だったり艦の頃の無念を晴らすためだったりで好戦的なものが多いが、この大和はそれがかかなり強い状態で現れていた。

朝起きればすぐに

『司令官、おはようございます！大変気持ちのいい朝です！本日は晴れのち晴れ、傘のいらない絶好の出撃日和です！さあ、本日も、張りきって、参りましょう!!』

などと言いなから執務室に突撃し、演習が終われば

『司令官！本日の演習もばっちり勝利してきました！さあさあ司令官！ここに今ノリにノツてる戦艦がいますよ！今出撃すれば空母に戦艦姫鬼級！選り取りみどりのバーゲンセールの開催をお約束しますよ！』

と、『提督』にこれでもかと出撃出来るアピールをし、さらには秘書艦業務を務めながらどさくさに紛れて自分の名前を出撃リストに加えようとしたりと、彼女はあの手この手を使って出撃させようとして提督を悩ませた。

だがしかし、泊地や鎮守府が増えてきた現状、国の要である大本営の艦隊が出撃することはそうそうなく、中々出撃の機会に恵まれないまま大和は日々悶々と過ごしていた。

そんな時、大本営の一部の艦娘を戦力が足りていない別の鎮守府へ出向させてはどうかという話が持ち上がり、出撃の機会を求めていた大和はこれに食いついたのだった。果たして大和の申し出は受理され、出向が決まったのがこの鎮守府というわけだった。

さて、一方の鎮守府側にも少々事情があった。

この鎮守府は約一年前に提督が着任したことでスタートした。この鎮守府の提督は

着任してからよく指揮を執り、艦娘と絆を深めながら、轟沈艦を一隻も出すことなく着実に戦果を上げていった。だが一つある問題が発生していた。

実はこの鎮守府、戦艦にとんと縁がないのだ。どれだけ資材を投入して建造しようとして、どれだけ海域を巡ろうと戦艦に邂逅することがない。

そんな状況でも、空母を主戦力としたり昼戦は回避に徹し夜戦で勝負を仕掛けるなどしてよく戦ってきたが、敵が強くなるにつれて一回の出撃で受ける損害も大きくなつていき、艦隊の負担を減らすためにと思い大本営に打診したのであった。

このような事例は大本営が把握している限りでは初めてであり、またそうでなくても各地の鎮守府から「ある程度ノウハウを持った艦娘の一時出向の要望」が散見されていため、大本営の一部艦娘の出向という流れと相成つたのだ。

こうして大和は鎮守府最初の戦艦として戦列に加わり、華々しい戦果と、ついでに一部艦娘への胃痛をもたらすことになった。

「それにしても過保護が過ぎると思います！こないだなんか『後先考えずに給料は使いきつてはいけないよ。万一の為に少し渡しておくから貯金しておくんだよ』なんて言うてお金まで渡してきて！大和だつてそれくらいちゃんとしてます！」

提督が意識を戻すと、大和はまだブルーたれていた。まるで反抗期の子供が親の行動に文句を付けている様だったが、いいや彼女は実際反抗期の子供に近い存在なのだ。

「愛されてるじゃないか」

「流石にお金まで頂くのは恥ずかしいです！それにこの大和が、お金の管理が出来ない様に思われているのが我慢なりません！」

「ほうほう、大和さんは懐具合はしっかりした出来る艦娘だと」

「もちろん！この大和にぬかりはありません！」

「ところで、これはこないだ浜風から聞いた話なんだがな」

「マルキューマルマルです。提督、今日の作戦行動はどうされますか？」

「給料が入ると『今日くらいは羽目を外してもバチは当たりませんよ!!』なんて言いながら、連日鳳翔のところで呑んだくれては浜風達に介抱される戦艦がいるのかな」

「…ヒトヒトマルマル。そろそろ昼食の準備をしないと。何がいいですか？」

「月末に近づくと毎食駆逐艦盛りにしては切なそうにご飯を食べてるどこかの大和型一番艦がいるのかな」

「ひ、ヒトゴーマルマル。提督、ら、ラムネでも飲まれますか？」

「あんまりにも雰囲気暗いので、見かねた駆逐艦達から戦艦盛りのカレーを買って貰ったのかな」

「ヒトキューマルマル！艦隊執務はここまでにして、お夕食にしましょう!!」

「今はヒトヨンサンマルだし看板にはまだ早すぎる。さあ、どこかの大和型一番艦さん、言い分があれば聞こうか」

「：イエ、アリマセン。ワタシハオカネガカンリデキナイワルイコデス：」

「何故片言。まあ分かればよろしい。あまり霞や浜風を心配させないようにな」

「はい、気を付けます…」

大和がシヨンボリとした面持ちで俯く。他人から自分の所業を淡々と伝えられるのは思いの外ダメージが来ると実感した瞬間であった。

「さて、さっきのトンチキな時報はさておきちょうどいい時間だ。ちよつと休憩を入れようか。」

「あ、それなら大和がお茶をご用意します！ちよつどいいのが入ったんですよ！」

「そうかい？楽しみにしてるよ」

「はい！」

そう言いながら大和は執務室を出ていく。先ほどとはうってかわって、誰かの役に立
てる喜びに溢れたその横顔は非常に可憐であり――

「なんだかんだ言いつつ、皆に愛されるわけだ」

そう言いつつ、提督は残った僅かな書類に取りかかるのだった。

青い先輩と白い後輩

「ねえ瑞鶴」

「なあに翔鶴姉？」

「今日は随分と眠そうだったけど、あまり夜眠れなかったの？」

「う…それは、あの、夜寝るのが遅かっただけというかなんというか…」

「寝るのが遅かったってそんなに長く…あ！ひよつとしてまた夜遅くまでゲームしてたの!？」

「えつと、いや、その………はい」

ここは鎮守府母港にある空母寮の廊下。言葉を交わしながら歩くのは正規空母の『翔鶴』と『瑞鶴』。かつての第五航空戦隊、通称『五航戦』の二人はこの鎮守府に配属されてからメキメキと実力を伸ばし、今や装甲空母として鎮守府きつての実力者である。

「ダメよ瑞鶴！夜はしっかり寝ないと次の日に響くし、お肌も荒れていいことないのよ

「？」

「いやー、それはわかっているんだけど止め時がわからなくなっちゃってつい……」

「んもう、今日はちゃんと寝るのよ？」

「はい」

とはいえ、海から離れ母港に戻れば二人も日常を謳歌する艦娘。演習と座学を終え一日のやるべきことを終えた二人は、とりとめのない会話を続けながら歩みを進めていた。

そんな二人の進む先から、一人の艦娘が歩いてくるのが見えた。

「あっ」「げ」

その艦娘に気付いた二人の口から声が漏れ出る。二者の内片方は心なしか嬉しそうに、もう片方は露骨に不味いというような反応を示す。

向こうもそんな二人に気づいたようで、二人に近づきつつ声を発する。

「あら、今戻りかしら」

「こんにちは加賀さん！演習と座学を終え、今戻りました」

「こんにちは翔鶴。演習の結果は聞くまでもないだろうけど、結果だけ見て満足しないように。学ぶべきことはいくらでもあります」

「わかってます。今回の演習でも上手く出来なかった部分はありますし、後でまた振り返りを行うつもりです」

「いい心構えです。一層精進するように」

「はい！」

翔鶴と言葉を交わすのは同じく正規空母の『加賀』。かつては『赤城』と共に第一航空戦隊、通称『一航戦』に所属した空母中トップクラスの實力を持ち、翔鶴と瑞鶴にとつては先輩にあたる。

そんな彼女はしばらく翔鶴と会話を続けていたが、やがて翔鶴の後ろにいる瑞鶴に目を向けた。

ジツと見つめてくる視線に耐えきれず、瑞鶴は声を掛ける。

「…えっと、こんにちは、加賀さん…」

「こんにちはは瑞鶴。今日は翔鶴と一緒に艦隊で演習だったと聞いたけど、しっかり動けたかしら」

「…ほとんど上手く行つてたけど、一回だけ動きを間違えて、翔鶴姉の邪魔をしちゃいました…」

「問題点がわかつているのなら結構。戦場では常に状況が変化するのだから、不測の事態も起こるでしょう。その時に冷静さを失わずに対応できるように励みなさい」

「…はい、わかつてます」

「……ところで瑞鶴、貴女朝からずっと眠そうな様子だったけど」

うつ、と瑞鶴が呻く。このあとの展開が予想できたからだ。

さて、一般的に提督の間で『加賀』と『瑞鶴』といえば、まず真っ先に挙がるのがその相性の悪さだろう。加賀は後輩たる瑞鶴をまだ未熟だと考えて接し、瑞鶴はその態度への反発を示す。瑞鶴は感情的な物言いをし、加賀は一見冷たく見える物言いをする。こともあり、喧嘩や衝突が絶えないのである。

「実際のところ、別に両者とも互いを否定しているわけではない。むしろ加賀は自分たちの跡を継ぎ立派に戦った瑞鶴たちを認めており、瑞鶴も加賀を含む先輩空母に対しては尊敬し見習うところの多い、いつか超えるべき目標としている。ただ同人士の気質が水と油であり、中々上手くいかないのである。」

ではこの鎮守府における両者はどうかというところ

「ひよつとして夜眠れなかったのかしら？それとも昨日何か怖い話でも？悩みがあるなら聞かすわ。よければ話してもらえないかしら」

「いや、そうじゃなくて…」

「もしかして枕が合わなかったの？ちようど【Numazon】に三つで二つ分の値段になる低反発枕と得も言われぬ姿勢のト〇ロがプリントされた最高品質抱き枕が売り出されてるのだけど」

「いらなくてそんな微妙なやつ！」

「それともなにか物音や光？それならこの三つセットなのに二つ分の値段の耳栓とアロマの香りがするアイマスクの方がいいかしら」

「だからいらないうってば加賀さん！」

この通りである。

一般的には不仲で有名な二人だが、ここでは「加賀が瑞鶴を気にかけてまくり、瑞鶴があしらう」といういささか以上に奇妙な光景が見られるのだ。それもかなりの構いぶりである。

「瑞鶴は夜遅くまでゲームをしてたらしいんです、先輩。どうも面白くて止め時が分からなくなったらしく…」

「そ、そう！ そうなの！ だから枕とか耳栓とかじゃなくて…」

「あら、そうなの。ならブルーライトカット加工された最高級鼻眼鏡がうってつけね」

「ちがーう！ ゲームで夜更かしよ！？ もつとこう、先輩として言うべき言葉があるでしょう！？」

「私はことゲームに関しては全くの門外漢なの。なにもわかっていない者が口を出すことほどおこがましいものはないと思わない？」

「叱って！ いったそ偏見バリバリで良いから叱ってえええ!!」

誤解のないように言っておくと、何も加賀はいつでも瑞鶴を始め後輩の空母に甘いわけではない。普段の鍛錬や座学では厳しく指導し、出撃の際には特に厳しくなる。瑞鶴たちの具申を跳ね除け一から十まで完全に論破し口論になったことも一度や二度ではない。ただし海を離れると一転、まるで孫を可愛がる祖父母のごとく後輩空母に甘くなるのだ。海と母港とで様子が一変するのは一航戦の特徴ともいえる。

「なんなら私自ら子守唄を歌った方がいいかしら。」

「いやいや歌わなくていいし、大体何を歌うつもりなのよ」

「【加賀岬く子守唄 ver. 伴奏付き】よ。伴奏といっても私が一人で付けるだけだ。クオリティと効果は大和で実証済みよ」

「寝かせる気ないでしょそのセレクト!というか何子守唄歌わせてるのよ大和は!」

「たまたま眠れなくて休憩室にいた時に声を掛けて歌ってあげたの。すぐにぐっすり寝てたわよ」

「ええ…なんであの歌で眠れるの…というかなんで『加賀岬』を子守唄にしようと考えたの…」

「やりました」

「あんだなんでもそれ言えいいと思ってるなら大間違いよ!!」

加賀が瑞鶴に可愛がりつつ絡んでいき、瑞鶴が律義に相手をし、翔鶴や赤城を始め周りが面白おかしく見守る。この鎮守府ではよくみられる光景である。

「瑞鶴」

「今度はなによ!？」

「明日には届くらしいから楽しみに待っていて頂戴」

「なにポチってるのよあんたは! ってうわさつき言ったの全部注文してる!？」

「やりました」

「だああああからああああ!!!」